

し、医者が妨げないかぎり「自然」には十分な力があると確信していた。それゆえ、医者から助産を取り戻し「産婆術」を再興することを訴える。それは、身体の「自然」の力をアメリカ土着のハーブによって助けることであつた。だが、実際にトムソンが提示したオルタナティヴは、かつての産婆術とは決定的な点で異なつていた。第一にトムソンは、ふつうの人々が日常的なセルフ・ヘルプとして植物薬をもちいることを望んだが、現実には、都市化に伴い一八二〇年代にはもはや薬草を近隣で調達する習慣が失われつつあつた。第二にトムソンは、出産をめぐる女性文化の喪失と家族のプライベートルト化という状況に最も合致した方法として、夫と妻が共同する家庭内出産を勧めざるを得なかつた。トムソンはさらに、出産や病気に際し個々の家族が連帯するよう尽力したが、その新たな組織はかつての女たちのコミュニティとは性質を異にしていた。

他方、十九世紀半ばにヨーロッパから移入されアメリカ独自のヘルス・リフォーム運動として発展したハイドロパシーにおける出産観は、トムソニアニズムのそれとはまったく異なる。第一に、「自然」な出産は「痛み」を伴わないはずだと理想化され、「痛み」は不健全で病気のしるしとして否定された。だが現状は、医者の助産や都市化・産業化などの社会変化により女性たちの身体の「自然」の力は衰え、もはや「自然」な出産は実現不可能だと認識されていた。そこでハイドロパシーは、個々の女性に、「準備的治療」により「第二の自然」

を構築するよう強力に勧めた。それは、ハイドロパシストたちが、社会の変動期にあつてアメリカの母としてまた家庭の守護者としての女性の役割を重要視していたからでもある。ハイドロパシーの第二の特徴は、出産の立ち会い人として、夫のみならず医学知識をもつ専門職者としてハイドロパシーの女医をあげていたことである。女医たちには、同時に「教師」として仲間の女性たちを導くことが要請されていた。夫の役割は精神的援助を与えることに縮減し、また、かつてのようにふつうの女たちが出産に参加することは否定された。

以上のように、出産の歴史の変動期に出現した二つのセクタリアン運動が提示したオルタナティヴは、顕著に過渡期的性格を体現していた。だが、いずれも、出産を自らの手に取り戻す試みをおして、「自然」との関わりをはじめとする癒しに対する姿勢、ひいては急速な近代化のうねりのなかで自分の生活のあり方を再考し癒しの主体となることを促す自己形成運動という側面を有していたことはまちがいない。

(平成七年五月例会)

多紀家関係の諸話題略記

矢数道明

一、多紀崇徳氏（元堅の曾孫）との知遇

多紀崇徳氏は、昭和三十年頃板橋区向原に居住され、通産

省に勤務しておられた。当時私は崇徳氏の住居の隣家石井家に時々往診しており、石井氏の紹介で崇徳氏と会うことができた。多紀家伝来の諸資料について尋ねたが、戦災により多くの資料全部が焼失し、疎開しておいた谷文晁筆の元堅の肖像画のみ残っているとのことで、これを間近に拝見した。この縁で崇徳夫人の診察をするようになったが、夫人が来院の際、藤浪剛一博士の『医家先哲肖像集』¹⁾をお見せしたところ、元堅と柳汁(元胤)の像が入れ違っていることを指摘され、訂正したことがあった。

二、元堅の作製した周尺に則った古刀圭

筆者は昭和初期に、「浅田宗伯が大正天皇の診察に際し、参内して調剤に使用したといわれる古刀圭」を一患家より、二人の女兒の難症の腎炎を治療した謝礼として贈られた。古色豊かな桃枝に形どり造られた両刀の逸品であった。故石原明先生に披露したところ、これこそ多紀元堅が作製した数個の中、日本に残る唯一の貴重品であるとのことであった。先生によると、元堅は古制の刀圭を作ろうと小林東平に諮り、考証学派で度量衡の大家である狩谷掖斎の蔵する貨布、錯刀の刀銭を規とし周尺に則り、制を定め概ね古態を得、古馬銜鉄を用い数枚を作らせた。当時医学館では講師の会があり、森立之(枳園)、浅田宗伯は医学館副校勘の役にあり、宗伯がこの古制刀圭を一枚ゆずり受けたものと考えられる。

また『時還読我書続録』²⁾に記載されている元簡が入手した齋刀銭は、傷寒論少陰病篇、半夏苦酒湯をつくるとき用いる

が、同型の齋刀銭に卵をのせ作り方を示し、齋の国で作製された刀銭も披露した。

三、多紀氏家系と金保元泰の墓

多紀家は、丹波康頼を医祖とするが、その第三子俊雅の流れを汲み、後兼康と称し、また金保と改め、その間三十代を経て多紀と改めている。この度、丹家元晴先生より、丹波家の家系図のコピーをお送りいただいたので披露した。さて、金保家初代元康の墓碑は池上本門寺にあるとされているものの不明であるので、本門寺を訪れ受付で訊ねてみたが全く不明とのことで空しく帰宅した。しかし、『漢方の臨床』誌編集長土屋氏より、藤浪剛一先生の「江戸幕府医官多紀家の墓碑」³⁾を知らされた。それによると、本門寺の墓は無縁となり所在不明となり、多紀元孝が延年四年に浅草寺境内に供養碑を建立し、現在は浅草寺公園内の銭塚地蔵の裏手にあるとのことであった(写真¹⁾)。早速現地を訪れ確認をしてきた。碑正面には「慧・日院法橋日悟大居士」(写真²⁾)とあり、側面には儒学者源鳳卿陽の撰文と、終りに「法眼金保安元丹波氏元孝立」と刻されている。元康の戒名は恵・日院日悟居士であるので、碑の慧の字は恵の誤りかと思われる。

参考文献

- (1) 藤浪剛一『医家先哲肖像集』刀江書院、昭和十一年
 - (2) 多紀安叔(元堅)『時還読我書続録』江戸写本
 - (3) 藤浪剛一「江戸幕府医官多紀家の墓碑」『中外医事新報』第一一九六号、昭和八年
- (平成七年十月例会)